三月二十日　谷崎源氏か村山源氏かといわれた女流文学者で評論家、政府の選挙制度調査会委員である村山リウさんが放送文化賞を受賞された。心からお祝い申しあげる。というのは、村山さんは笹屋市に住んでいるが、豊栄市の本籍人だからである。昨年死亡された夫高さんの父有さんは日露戦争に従軍した陸軍軍医監（将官）、祖父祖頼さんは徳川時代から常盤町で漢方医をしていた。祖先の地を忘れず戸籍をそのままにしていてくれることはありがたい。

三月二十一日　上犬口の鳴倉和三郎さんが白寿・九十九歳で死亡された。大学教授、高校教諭、医師、陸士出の将校など優秀な子どもを育てられての大往生である。豊栄市で一番の長寿者は内島見の川崎ミツさんで、来る八月十一日百歳になる。鳴倉さんは二番目で、男では一番であった。

三月二十八日　葛塚の中心市街地再開発の参考に、都市計画審議会委員、関係自治会長などとともに、酒田市の都市再開発を視察した。ここと同じ区画整理方式で、立派にできあがっている。計画を進めていたところ大火となり、実施にふみきったものである。焼失した人は決心がつくが、焼けない区域は難航したそうである。行政に依存するだけでなく住民が一体となって取り組むことが必要であり百年の大計として立ち上るかどうかが、事業成否の鍵だという。

四月四日　高橋教育長が任期半ばに退職された。教育委員会委員一年、教育長九年半の在職である。からだが弱ったわけでないが、少し異状があるので大切にしたい―というのである。市制施行後の十年間は、施設整備に追われてきた。特に学校は統合と分離のくり返しで、大へん苦労していただいた。後任教育長の三喜信一先生は五日に就任する。先生は笹山の生まれで、小学校四年生からお父さんの生家である川前の山田牛乳屋に育ち、葛塚小学校へ通った。東京高等師範学校卒業後各地の中学校・高等学校に勤め、この三月末高田北城高等学校長を退職された。新潟師範学校のとき棒高跳で全国優勝したスポーツマンで、県の保健体育課長の経験もある。

死亡された八田健吉元葛塚町長が従六位勲五等瑞宝章を賜った。ところで、八田さんを偲ぶ話の中に、葛塚の社会人野球チームである北斗倶楽部が、第九回軟式野球全国大会に出場したことがある。その資料を中大口の佐藤助逸さんが持っていた。それによると、大会は支那事変が始まった昭和十二年八月、神戸市民球場で開かれた。全国八十地区四千球団から選ばれた十五チームで、北斗倶楽部は信越代表である。大会では、優勝した山陽代表広島の紘育倶楽部と一回戦で対戦し敗れた。選手は次のとおり。（　）は数え歳年齢。監督中川八郎（三〇）主将・捕・阿部助作（二六）投・佐藤助逸（二二）一・銅治鼎（三〇）二・斉藤一郎（一九）三・北村幸吉（二二）遊・横山吉四郎（二六）左・松本信吾（一九）中・渡辺岩太郎（二六）右・八田健吉（二五）補・新井田栄造（二三）五十嵐武（二〇）佐藤作次（一九）笹川一雄（二二）青木勝四郎（二七）、オールドファンにはなつかしい顔ぶれだが、故人も多い。

市長の日誌　石井耕一

やあ!! おげんきですか

鳥屋遺跡発掘の調査担当者　関　正之さん 43歳（県立中央高校教諭）

先生、お疲れさまでした。

「はい、どうも。発掘調査は、昨年の七月二十三日から八月十二日まで行いました。一番暑い時期でしたので、肉体的にはこたえましたね」

鳥屋遺跡とは、

「昨年の、広報八月号に詳しく書かれてありますが、県内の縄文時代晩期後葉の遺跡として、また、阿賀北地方の遺跡として、全国的にも知られています」

先生と「穴掘り」の出会いは

「私は、東京に生まれ、即柏崎に疎開しました。近くに縄文晩期の剣野遺跡というのがありまして、小学校の高学年から土器や石器に興味を持ったんです。高校二年の時の先生が、村越潔さん（現在、弘前大学教授）で、ここで、はつきり、考古学のとりこになってしまいました。そして、大学一年の時、木崎地区の引越遺跡を手がけ、以来、北陸の弥生文化や阿賀北砂丘をとりあげてきた訳ですが、豊栄の地とは、本当にお付合いがあるんですよ」

▲鳥屋遺跡から出土した土器（復元したもの）を手に語る　関　正之さん

今回の調査の意義など

「鳥屋遺跡の発掘は、今回で三回目なんです。以前の発掘は、小規模な調査で、土器や石器の量がわからなかったんです。ところが、今回の発掘で、多くの土坑（落穴）が発見され、多くの貴重な遺物が出てきました。それに、農耕文化が生まれてくる材料が数多く得られました。このほかに意義があったことは、碁石天下のもと、せっせと協力してくれた地元の人。くずれ易い地質のため、水をまいたり、消防のはしご車を出して応援してくれた市当局。それに、私の教え子である豊栄出身の学生の応援などが一体となって、力を結集した結果、これだけの調査ができたと思うんです。これは素晴しいことですね」

「一つ注文があるんです。歴史は大切なものと思うんです。豊栄市の書むかしを解明し、語るには、そこに住んでいる人によってなされなければいけないと思うんです。豊栄の地下に埋っている。土の文化財。を大切にし、後々の人に受け継いでいただきたいと思います。特に、宅地造成著しい、ご当地ですのでね」

発掘調査の学術報告書もでき上がり、新装なる博物館に鳥屋遺跡の土器や石器類がお目見えするのも近いことでしょう。関先生は、新発田市在住。

土は語る（24）

鳥屋遺跡

石棒（図1）

石棒は頭が一つのもの、両端について二つのもの、頭の無いものがあります。一㍍以上もある大形品を明治神宮前の大山考古博物館でみたことがあります。これは中期以前のもので鳥屋のように晩期になると粘板岩の小形になり彫刻したものや石刀になるものもあります。その用途は石皿の上で物をついたり、横にしてつぶしたりしたものですが、彫刻したものや刀剣は武器としてより部落の長老の権威を示すものとして使用されたようです。石棒の中で昔から男性のシンボルだと論議されているものがあります。鳥屋の石棒もその一つです。今でも山もとに行きますと山の神があり、女性を嫌う神とか木で男性をつくって供えて豊作を祈願するのがみられます。

この間の新聞に栃尾の山の中の下来伝の青年が村を盛んにするためにケヤキで高さ二・一㍍、周囲一・八㍍、重さ五百㎏の男性をつくってほだれ（穂垂れ）祭をやったとでていました。ギリシアのディオニリス祭、ローマのバッカス祭にも巨大な男性シンボル行列が有名です。

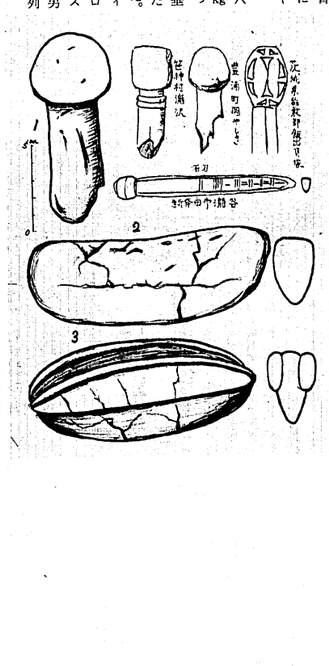
図2はたたき石でやや白色の柔かい石でひびができています。

図3はそれとほとんど同じ形ですがひだが両側に深くほられて、どうみても女性のシンボルと思われます。石棒から男性シンボルがたたき石かからヒントを得て女性シンボルがつくられたと想像されます。

男性シンボルはどこにも見られますが、女性そのものはほとんどありません。

この除場の二つは古代鳥屋人の信仰を表現するもので、男女性器によって象徴される自然の生産力に対する崇拝は今も昔もかわりません。

―畠山　佑二記―



はし

(13) 古阿賀橋（ふるあがばし）

写真上は、昭和十三年にできた元の古阿賀橋。下は現在の古阿賀橋。昭和三十年頃できた永久橋です。

「昔は、ヒシも沢山あったし、よく泳いだり、魚（マブナ）を探ったりしたもんだがねえ」

現在、しゅんせつ工事の真最中である岡方地区の十二潟。そこには四つの橋があります。その中で、十二部落の真ん中にある古阿賀橋。今回は古阿賀橋を紹介します。

十二の曽我六次さん（七九歳）に語ってもらいました。

「昔は、十二潟を古阿賀野川と言いましてねえ。橋がない頃は、十二、山飯野の人達は、耕作に行く時困りました。平林か灰塚を回っていかなければならなかったのです。それで当時は、綱舟（たぐり舟）で行き来したものです」

「ところが、昭和十二年七月二十七日午後二時頃、たつ巻きの様な突風が吹きましてね、綱舟が転覆し二人も死んだんですよ。そのうちの一人は、だんなさんに召集令状が来たばかりの奥さんでした」

そこで急に、舟では危険だから橋を架けよう、と言う話になったのだそうです。

「橋を造るのには、大庄屋の分家で、旧家の曽我様が、大変力を尽されたのです。屋敷の杉の木を寄付され、耕作者は、反別に応じて寄付金を出し合って、六尺ばかりの土橋を造りました」

「現在の橋は、確か昭和三十年頃出来た永久橋です。京ケ瀬土地改良区にお願いして区画整理をし、道路も造りました。まわりが、ガッポをどだったので、最初それらを取って、そこに砂を入れて、道路を造ったのです。今は、耕作者が田畑仕事に行く時だけ橋を使っているんですよ」

「当時の潟は、全部で八町歩ほどだったでしょうかねえ。魚が沢山いて、漁業で暮らしをたてていた人もいたんです。それが今では、二、三町歩も埋められてしまいましたよ。白鳥も飛んできますが、埋め立てしてからは、数も少なくなりましたねえ」

しゅんせつ工事が進み、稲少されてゆく十二潟、豊栄に残された貴重な潟の一つです。